

# 日本図の変遷

～赤木から伊能へ～

小野寺淳 平井松午

21

一八二八(文政十一)年九月に起きたシーボルト事件はよく知られている。長崎オランダ商館勤務の外科医フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(一七九六—一八六六年)が、禁制の日本図を国外に持ち出そうとした事件で、翌年、シーボルトは国外追放、日本図を渡した幕府天文方の高橋景保は死罪となった。日本図作製に関わった関係者も、江戸払いや遠島処分となっている。当時、日本は異国船打払令を布告して、鎖国体制のもと日本図の持ち出しは重罪とみなされた。

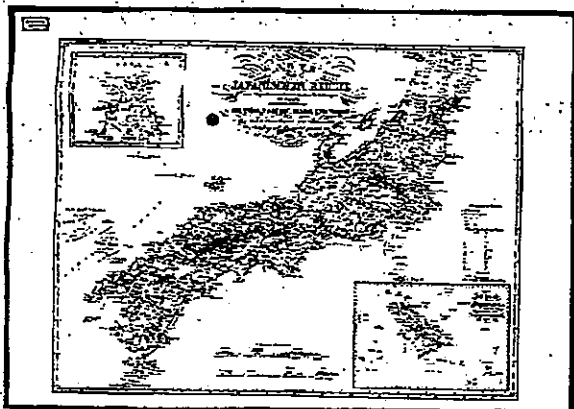
## シーボルト日本図

シーボルトが持ち出そうとした『日本図(カナ書き特別小図)』は長崎奉行所に没収され、現在は国立国会図書館が所蔵しウェブ公開されている。シーボルトはこの地図を持ち帰ることができなかったにもかかわらず、四〇年にシーボルトが出版した『NIPPON』には、このカナ書き日本図をベースとする東北以南の日本図が収載されている。シーボルトがすでにオランダに送っていた二百点を超える日本関連の各種地図は、ライデン大学図書館などに所蔵されているが、これらの中にカナ書き日本図は確認できない。それゆえ、没収されたはずのカナ書き日本図の地図情報をシーボルトがどのように持ち帰ったのか長らく不明であったが、近年、青山宏夫氏(国立歴史民俗博物館名誉教授)らが、その謎を解き明かしている。

それによれば、カナ書き日本図は、海岸線は縮尺八十六万四千分の一の伊能特別小図、国界線は長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」などを参考に作図されていて、これを写した五点の紙片(模写図)がシーボルト末裔のドイツのフォン・ブラウンデンシュタイン・ツェッペリン家に保管されている。シーボルト事件発覚直前に、カナ書き日本図の輪郭や国界線などを急いで写し取ったとみられる。

シーボルトはドイツ南部の出身で、日本の物産調査を目的にオランダ商館に採用されていた。さらに、シーボルトと同年配でオランダのナイエンハウスが収集した資料の中に、『NIPPON』に収載された日本図の校正図九点が残る。これら新出資料の分析から青山氏は、シーボルト日本図の地図投影法や地図の表記などを検証している。

(ひい・しゅん)＝徳島大名普教授



シーボルト日本図(ライデン大学図書館蔵、66・5X92・5)。長崎一江戸間の参府ルートも描へ。伊能忠敬の地図複製「233」から転載